

探求と孤独——ヴラジーミル・ナボコフの「ランス」 Quest and Solitude in Vladimir Nabokov's "Lance"

鈴木 聡
SUZUKI Akira

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

1. 惑星、湖、騎士
2. ロマンسから宇宙へ
3. 言説の共存
4. 探求者の孤独

キーワード：ヴラジーミル・ナボコフ、騎士道ロマンス、登山、惑星間探査

Key Words: Vladimir Nabokov, chivalric romance, mountain climbing, interplanetary expedition

【要旨】

短篇小説「ランス」のなかでヴラジーミル・ナボコフが試みたのは、過去、現在、未来という異なる次元に属す言説を共存させつつ、普遍的主題を追求することであった。主眼となるのは、人間の肉体的、精神的活動の（理論的にいえば無限の）可能性とかかわるものである。一見したところ、この作品は、サイエンス・フィクションとして読むことのできる側面を有しているようだ。しかし、もともとサイエンス・フィクションというジャンルにたいして批判的な作者は、それとは極めて懸け離れた観点を導入しようとしている。この作品においてナボコフは、ケンブリッジ大学在学中に研究対象としたことのあるクレティアン・ド・トロワやサー・トマス・マロリーに代表されるような中世の騎士道ロマンス、現代における登山、未来における惑星間探査という三つの題材を取りあげたのであった。

韻文で書かれた戯曲『極点』、長篇小説『賜物』、短篇小説「オーレリアン」などに見られるように、ナボコフの作品においては、探求者たちはしばしば不幸な運命を辿る。「ランス」においては、中心的登場人物は目的地となっていた惑星（火星と思われる）からの帰還を果た



す。しかしながら、そこでなにが得られたかが明らかにされることはない。彼と両親のあいだの意思の疏通には致命的な困難が生じているようである。こうして、人間が未知の領域に挑戦しようとするとき、なにものによっても救われることのあり得ない孤独が代償として付き纏っていることが含意されることとなるのだ。

In his short story “Lance,” Vladimir Nabokov attempts to bring discourses belonging to three different levels (the past, the present, and the future) into a concurrent state in order to focus on a universal theme. What is sought within the text relates to the (infinite, in theory) possibilities of human physical and mental activities. At first glance, the work appears to have some aspects similar to those which could be found in so-called science fiction. But what the author basically critical to science fiction in general as a genre wants to introduce is completely disconnected from that genre. In this work, Nabokov takes up three main subjects: chivalric romance in the medieval era, as represented by Chrétien de Troyes whose works Nabokov studied at Cambridge University and Sir Thomas Malory, mountain climbing in modern days, and interplanetary expedition in the future.

In some works of Nabokov, explorers or questers often follow unhappy fates, as seen in a one-act verse play, *The Pole*, his last Russian novel, *The Gift*, and one of his short stories originally written in Russian and translated into English, “The Aurelian.” In “Lance,” the central character returns from his destination planet (which, in all probability, can be identified as Mars). However, it is not clear what was obtained there, and it becomes fatally difficult for his parents to communicate with him. As this situation exemplifies, when challenging an unknown territory, one must be isolated and their solitude can never be saved.

1. 惑星、湖、騎士

ヴラジーミル・ナボコフが、アメリカ合衆国に居を移した当初、『アトランティック・マンスリー』誌その他の定期刊行誌に発表したのは、それ以前にヨーロッパで（ロシア語ならびにフランス語を用いて）執筆していた短篇小説を英語に訳したものであった。具体的にいえば、「雲、城、湖」（1937年、1941年）¹⁾、「オーレリアン」（原題は「ピリグラム」[“Пилграм”]、1930年、1941年）²⁾、「マドモワゼル・O」（1936年、1943年）³⁾、そして、それらよりやや発表時期が遅れることとなった「フィアルタの春」（1936年、1947年）⁴⁾である。そのいっぽうで彼は、「アシスタント・プロデューサー」（1943年）⁵⁾以降、英

語による創作を本格化させるようになる。

合衆国で発表された作品は、最初から英語で書かれた作品が五篇に達した時点で、短篇小説集『九篇の短篇小説』（1947年）⁶⁾にまとめられ、その後、さらに作品数が増えてから、十三作品を収めた短篇小説集『ナボコフの一ダース』（1958年）⁷⁾が編まれることとなる。この作品集に収録されなかった「ヴェイン姉妹」（1951年三月執筆、『ハドソン・レヴュー』誌1959年冬号と『エンカウンター』誌1959年三月号に掲載）⁸⁾を併せて、ナボコフが英語で創作した短篇小説は全部で十篇であり、それらの最後にあたる作品が「ランス」（1951年十一月執筆、『ニュー・ Yorker』誌1952年二月二日号に掲載）⁹⁾である。

「ヴェイン姉妹」を含む短篇小説集『ナボコフの四重奏』（1966年）¹⁰⁾以降、この分野にたいするナボコフの関心は、新作の執筆ではなく、かつて自分が（ベルリン、パリ、マントン、リガなどで）ロシア人亡命者たちに向けた雑誌のためにロシア語で執筆した旧作の翻訳紹介のほうへと移行していったものと思われる。合計して三十八篇の翻訳作品（サイモン・カーリンスキーならびに作者の息子であるドミートリイ・ナボコフを共訳者としたもの）を収録した1970年代の三冊の短篇小説集——『ロシア美人とその他の短篇小説』（1973年）¹¹⁾、『独裁者殺しとその他の短篇小説』（1975年）¹²⁾、『ある日没の細部とその他の短篇小説』（1976年）¹³⁾——は、短篇小説作家としてのナボコフの全容に近いものを英語圏の読者たちが把握し得るようにすることを目的としていたと察することができる¹⁴⁾。

1940年代から1970年代にかけてのナボコフの歩みをこのように簡単にまとめてみただけでも、1951年に書かれたふたつの短篇小説、「ヴェイン姉妹」と「ランス」がなにか分岐点のようなものをかたちづくっていることは明らかであろう。作者自身、みずからの全短篇小説の総決算あるいは頂点に位置づけられるべきものを目差してよい頃合いに到ったことを意識していたのかもしれない。しかし、そこには、新たな創造の可能性に挑もうとする作者の果敢な試みが、編集者ならびに読者の致命的な無理解と直面せざるを得ないことを痛感させられるという代償がともなっていた。「ヴェイン姉妹」が、長年にわたってナボコフの最良の理解者と目されてきた、『ニュー・ Yorker』誌の編集者、キャサリン・A・ホワイトによって拒絶されるという憂き目に遭った経緯にかんしては、以前、考察したことがある¹⁵⁾。

ホワイトに宛てた書簡（1951年三月十七日付）¹⁶⁾のなかでナボコフは、自分がこれまで物してきた短篇小説はことごとく「文体の織物」であって、一見したところ、どの作品も「動的な事象」を扱っているようには見えないのだと主張した。自分にとっては、文体こそが肝要だというのである。それは、作家の独自性という根幹にかかわる点でもあったはずだ。実のところ、ナボコフにしてみれば、「鋭敏な愛情溢れる読者」として信頼してきた編集者にたいして、そのような根本的なことがらをわざわざ説明しなければならなくなるというのは、まこと

に不本意な巡り合わせであったに相違ない。

同じ書簡のなかでナボコフは、『ニュー・ Yorker』誌1948年五月十五日号に掲載された短篇小说「記号と象徴」¹⁷⁾を一例として取りあげている。この作品が先駆的に示しているように、現在自分が構想中の作品の多くは、「表面の半透明な物語の内部に、あるいはその背後に第二の(主要な)物語を織り込む」という方式に従うことになるだろうと彼はいうのだ。そのような「内部」あるいは「内的構想」を読み取ることが、作品解釈のために必要な条件であることを作者自身が釈明しなければならないという異例の事態には、聊か危機的なものが感じられる。

「ヴェイン姉妹」のような作品の場合、作者が想定するような正しい読みかたがそもそも困難であることは否定できない。そのいっぽうにおいて、たとえ正しい読みかたを成立させる条件が充足されなかったとしても、読者が作品に接し、それを理解したと信じこんでしまう可能性は残存するだろう。まことに皮肉なことながら、編集者、批評家、一般読者の反応がいかに好意的であろうとも、それが気紛れな、偶発的なものでしかないという意味合いにおいて、不確定性という要素が払拭されることは竟にない。作者は、そこになんら信頼に足るものを見いだし得ないという仕儀にも立ち到りかねないのだ。

1951年という時点でナボコフが経験した出来事が、文学作品も一種の商品と見なされ、消費の対象として扱われることを宿命づけられた社会環境下で、他の多くの文学者たちもまた対峙し、克服することを余儀なくされている種類の障碍、圧迫、あるいは矛盾と深くかかわっていたことは確かである。だが彼の場合には、そのような難局に立ち向かうよりも遙かに差し迫った課題を突き付けられていた点を見落とすべきではあるまい。すでに示唆しておいたように、編集者との軋轢に悩まされていたのとちょうど同じ時期、ナボコフが短篇小说というジャンルに注ぎ込もうとしていた創作意欲、その可能性に投企しようとする志向は、極限にまで達しようとしていたのではないか¹⁸⁾。そして、その結果として生み出されたのは、彼の全短篇小说のなかでもひととき異彩を放つ作品であった。

エドモンド・ウィルソンに宛てた書簡(1952年一月二十四日付)¹⁹⁾のなかでナボコフは、「ランス」に傾注した「神経エネルギー」には「彼方の猛烈な雷雨十数り」に相当するものがあつたと述べている。そこまで思い入れの深い作品でありながら、構想段階において彼は、それを雑誌編集部を受け容れさせることは難しいのではないかという悲観的な見通しに追い詰められ、そこからなかなか抜け出せなかった模様である(1951年六月十三日付ウィルソン宛書簡)²⁰⁾。「自分がこれまでに書いた最良の短篇小说」であることを自負していた「ヴェイン姉妹」にたいする編集者の冷淡な反応から受けた衝撃が、依然として尾を引いていたことが見て取れよう。「ランス」が「難解な」²¹⁾作品であることは、ナボコフ自身認めていた。それが

無事『ニュー・ Yorker』誌に掲載される運びとなったことは、彼にしてみると、やや意外ななりゆきであったのかもしれない。

書き出し——五つのセクションからなるこの短篇小説の第一セクション冒頭——からして、「ランス」は読者の意表を突く作品である。「おそらくはすでに与えられているだろうと思われる、その惑星の名称のことはどうでもよい。それがもっとも好適な衝の位置関係にあるときには、地球までの距離は、先週の金曜日とヒマラヤ山脈の形成期のあいだにある歳月——読者の平均年齢の百万倍——をマイルに置き換えた程度にすぎないとしておいてよいだろう。ひとの空想が及ぶ望遠鏡の範囲内で、ひとの涙のプリズム越しに眺めてみるならば、いろいろ細かな点はあるにせよ、現存するさまざまな惑星の例と比べてとくに顕著な点があるわけではない。薔薇色の球体に、黒ずんだ斑紋が散らばっている大理石状の模様があるだけだ。流動する宇宙空間の、際限ない、なんの見返りもない荘厳さのうちにあって生真面目に回転を続けている、無数の物体のひとつなのである。」(Nabokov 2002: 632)

匿名の語り手（「私」）がひとまず話題にしようとする惑星には、「海」（*maria*²²）があったとしても、それは海ではないように、「湖」（*lacus*）があったとしても、それは湖ではない。天体望遠鏡によって観察され、月面図に記されるような、天体表面上の暗部を指す月理学用語が、地球表面上の海や湖を比喩として利用した、便宜的な呼称にすぎない——天文学者の名前²³）を用いるのも同様である——ことが踏まえられているのだ。それらの呼称は、だいたいにおいて古風な様式を保っていて、響きのよさ、典拠とは無縁の魅力という点において、騎士道ロマンスに附随するいくつかの地名に勝るとも劣らぬところがあると語り手はいう。いずれにしたところで、そうした魅力的な名称が実体と懸け離れたものであることは、想像に難くないのだ。

ある惑星のことを話題として持ち出しながら、その名前は、取るに足りない些事であるから、敢えて明示するに及ばないと嘯いていることが明瞭な一例となっているように、この短篇小説にあっては、さまざまなことがらが呈示される都度、重要ではないとされ、いったん言及されてから、そのまま放置されることになりがちである。そのいっぽうで、望遠鏡を通して捉えられる惑星と、過去の文化遺産である騎士道ロマンスが唐突に結びつけられているように、やや強引とも思えるような、奇妙な屈折が生じている点にも読者は随所で注意を惹かれることになるだろう。

結局のところ、ここでは、宇宙や惑星という話題は、いわば踏み台（発射台とでも呼ぶほうが適切だろうか）のような役割を果たしているにすぎない。その話題自体を敷衍することに重点があるわけではないため、それにたいする一般的関心が顧慮されることもない。飽くまでも、語り手が独自の連想なり関心事なりを自由自在に導入し、展開させるための暫定的な口実とし

て必要とされているだけなのだ。

2. ロマンズから宇宙へ

ナボコフの短篇小説に限られるわけではないだろうが、テキストが読者に徐々に与えようとしているものは、解釈の明快な道筋というよりも、個々の読者がそれをかたづくるために利用し得る断片的素材、あるいは鍵のようなものだと考えておかなければならない。一見したところ漫然とした叙述のなかにも、解釈のために必要不可欠な手掛かりが抜かりなく配置されていることは間違いなのだ。物語中で一定の機能を帯びることになるらしい惑星から、そこに仮初めに地名を賦与するという約束事へと話の焦点が移り、命名にあたって、海、湖などといった地理用語や、天文学者の名前が用いられる慣行の恣意性が指摘されたのちに、騎士道ロマンスと称されるジャンルへと話題が急転回するという、「ランス」第一セクション冒頭部の流れにもなんらかの必然性があることはいままでもない。

読者が改めてその点に気づくのは、テキストを少し読み進んだのちのことになるだろう。語り手による連想の機縁のひとつは、この短篇小説の中心的登場人物であるエメリー・ランスロット・ボウクの間名のもととなっている、円卓の騎士のひとりランスロット（フランス語ではランスロ）が、「湖の乙女」²⁴⁾によって育てられたという生い立ちゆえに、「湖のランスロ」(Lancelot du Lac) もしくは「湖の騎士」(Chevalier du Lac) と呼び習わされてきたことにあるようだ。とはいえ、実際には、そうした通名が定着しているだけで、ランスロット自身と特定の湖とのあいだに、特定の、密接な関係が存在しているわけではない。つまり、実体と呼称はうまく釣り合っていないことになる。齟齬あるいは乖離が生じているといってもよいだろう。その点では、惑星の地形を指す呼称として用いられている湖という語が、地球上に実在する湖とまったく類似するところのない、むしろ砂漠に似た平原に与えられたものであるのと同様といえるかもしれないのだ。

一種の元型的存在としてのランスロットが物語の要となっているらしいことが明確になってくるのは、第三セクションにはいつてからのことである。「ボウクの典拠が正確ならば、「湖のランスロ」[Lanceloz del Lac] という名は、十二世紀に書かれた『荷車物語』²⁵⁾の3676行目にはじめて現われる。」(Nabokov 2002: 637) エメリー・ランスロット・ボウク²⁶⁾が一員として挑もうとしている「最初の惑星間探査」(Nabokov 2002: 634)が核心をなすという、物語の方向が読み取れるようになったところで、このような余談が差し挟まれるのは、彼の父が、「歴史学の老教授」(Nabokov 2002: 635)、「卓越した中世文学者」らしい相貌の持ち主として語り手によって思い描かれていることと関連している。

アーサー王物語の基本的枠組みを据えたと考えられる五篇の物語詩によって知られるクレテ

イアン・ド・トロワは、ナボコフ自身、ケンブリッジ大学トリニティ・コレッジに在学していた1920年代の一時期、研究対象としたことがあった²⁷⁾。その記憶が、現在あるいは未来における冒険というヴィジョンによって呼び醒まされたということなのだろう。そこからさらに齎された、中世文学の専門家と宇宙飛行士という対極的な人物像を親子として設定するという発想自体が、なんらかの意味を帯びていることは明白である。その点に読者が着目することがなによりも重要なのだ。過去における騎士道ロマンスと未来における宇宙旅行を重ね合わせるという大胆極まる試みこそ、ここで目差されているものなのではないかという展望が生じるからである。

しかしながら、その段階に到るまでには多少の紆余曲折を経なければならない。一面において語り手（あるいは作者）は、みずからが新たな物語の構築に取りかかることをまず念頭に置きつつ、そのために要する苦難を、未知の領域の踏査と類比し得るものとして思い描き、寓意的に擬えようとしているようにも思われる。「ランス」の読者は、取りあえずその点を念頭に置いておくことが必要であろう。創作の過程と同じように、読解の過程もまた決して安直になし遂げられるものではない。一步一步を確かめ、踏み固めることが、常に読者にたいして求められていることを考えに入れておいてよいはずである。

「ランス」が直接的、直線的に進行する物語でないことは、その標題の意味がなかなか明らかにされないことによっても裏づけられるだろう。それが中心的登場人物の愛称であることが明示されるのは、第二セクションにはいつてからのことであり、第一セクションで最初にその人物の名前が言及されるさいには、ランスロットという中間名を頭文字に置き換えたエメリー・L・ボウクという呼びかたが暫定的に使用されている。そのために生じたものは、些細な遅延でしかないともいえる。だが、そこになんらかの意味を見いだすことも不可能ではないのだ。

語り手は、本題に取りかかることをなるべく遅らせようとしている。そして、その理由がある種の逡巡と関連することを仄めかそうとしている。根本にあるのは、虚構をあたかも現実であるかのように呈示するという、慣習的に定着した語りの様態をそのまま踏襲することを潔しとしない、懐疑的な姿勢であると考えてよい。そこからくる躊躇いが読み取れるようにするという配慮が、ここでは働いている。物語の経路にいよいよ乗り出そうとするまえに、語り手はひとまず間を置こうとする。自分がなにについて語るつもりがないかをまずはっきりさせておかなければならないと思い定めたからにはほかなるまい。みずからの短篇小説という、一種の天空図とも見なし得るものなかで「個々の点と終止符」（Nabokov 2002: 633）が果たしているような役割から、「はっきり確定されすぎている惑星」を締め出すことにしたという決意が、最初に宣言される。それに加えて、科学者たちが記者たちに語ったこととして伝えられるよう

な、「あれらの技術上の預言」とかかわりをもつことも頑として拒絶されるのである²⁸⁾。

さらに語り手は、自分にとっては「特殊装備関係」もまったく無用だと断じている。気密服や酸素呼吸装置のようなものが、実際的な問題と思われているとしても、それは現時点で宇宙旅行を想像する場合に限られるのであって、この作品において取り扱われるような未来においては、その種の仕掛けは、完全に時代錯誤的で、宇宙飛行士たちにとって用をなさないものと化しているに違いないという、理屈からいって、おそらく妥当な前提があるだけではない。機械に類するもの全般が語り手のうちに掻き立てる不快感が、なにも増して克服し難い障碍だということになるだろう。率直に言って、電球交換のような単純な作業ですらなるべく敬遠したいと望む語り手にとって忌まわしいのは、新しい電球が慄然とさせるほどすばやく点灯する瞬間だとされている。それは、「ひとの剥き出しの掌中で孵化する竜の卵」に喩えられるようなものだ。そのような語り手の視点からすれば、機械や電気にかかわるものにはいっさい手出しせずにおくに越したことはないというわけである。

そして最後にもっとも肝腎な点として、語り手は、サイエンス・フィクションというジャンルを全面的に退ける意向を表明する。語り手にいわせるならば、そのジャンルは、ミステリ雑誌と同じような、退屈な読み物の集合体にすぎない。会話や、さまざまに偽装された常套句が溢れているばかりで、舞台が宇宙であろうが居間であろうが、大差はないというのである。主にスペース・オペラと呼ばれる一連の作品が陥っている慣用表現が辛辣な批判的とされているとはいえ、「陳腐」、「通勤用」などといった形容詞が示すように、大衆の嗜好に迎合しつつ、巧妙に誘導する類の文学作品全般が軽蔑の対象となっていることは容易に見て取れよう。

「それら[常套句]は、ただ形と色合いだけが異なっているにすぎない「詰め合わせ」クッキーのようなものなのに、それによって抜け目のない生産者たちは、狂ったパヴロフ的な世界²⁹⁾で、涎を垂らした消費者たちを誑かすことができるのだ。そこでは、余分な経費を要することなく、単純な視覚的価値にあれこれ手を加えるだけで、やがて味わいに影響を及ぼし、ひいてはそれにとって代わるようになる。そこにあるのは、才能や真実が罷り通るのと同じ道筋である。」

以上で見たように、1950年代における天文学、理論物理学、宇宙工学などの知識、それらが呈示し得る有人宇宙飛行の可能性などといったものにいっさい関心を払おうとしない語り手は、未来における宇宙への旅を真に迫っていると感じさせるような細部の克明な描写も最初から回避するいっぽう、十九世紀から二十世紀を通じて多くの読者の想像力を刺戟し、誘惑してきたサイエンス・フィクションとは完全に一線を劃した手法を用いて、当時においては実現可能性の予測すら覚束なかった、遠大な企図に思いを馳せようとしたのだということになる。

「未来とは時代遅れを反転させたものにほかならない」(Nabokov 2002: 635)という語り

手の言葉は注目に価する。ひとが自己にたいして誠実に振る舞おうとするならば、どれほど下調べを重ねても予見し難い、珍奇なものを想像し、表現するために有効な言い回しとしては、「時代離れしている」とか、「今日的ではない」といったもの以外、考えつかなくても無理はないというのが、語り手の主張である。たとえば、ミスタ・ボウクがこの短篇小説にたいして有している強みとは、かなり以前に亡くなった語り手の大叔父との類似性を除くならば、その外見が時代離れしている点そのものだとされる。物語の舞台が未来であるとしても、想定される年を「1」ではなく「2」もしくは「3」で始めるような細工は、他の者たちに任せておけばよい。「私には、いかなる種類の既得権をも侵害しようとする欲求はない。これは厳密にいて、非常に簡素な舞台装置と最低限の背景しかない素人芝居、いわば古い納屋の隅に転がっている棘を抜かれた豪猪の屍骸のようなものなのである。」(Nabokov 2002: 634)

ロケットや、「地球に約束されている人工小衛星」(Nabokov 2002: 633)、諸国が競い合うようにして建造する宇宙船などは自分の与り知らぬものと称する語り手は、1950年代後半以降における宇宙開発競争³⁰⁾を臆気に予見しながら、人間が地球から他の惑星へと移動する手立てに具体的に触れることは極力差し控えるという、自家撞着に陥りかねない立場にみずから身を置いている。第二セクションで言及されるランスの旅立ちは、詳細がまったく不明であり、ただ「途方もない」(Nabokov 2002: 635)と形容されているだけなのである。

ランスは、最近、アンデス山脈のまだ名づけられていない山頂に登ったさいに、人跡稀れな場所で見つけた「未成熟なチンチラの番い」(チンとチラという名を与えられている)を連れ帰っていた。「灰色の、見事なまでに和毛で覆われた、兎くらいの大きさの齧歯類(豪猪亜目)」の世話にあたって注意すべき点を母に指示しておくなど、出発直前のランスの挙措は、すべてが、日常ととくに異なるところのない、ごくさりげないものであるかのような印象を与える。

「彼は、手ぶらで、帽子も被らず家を出てゆく。その足取りには、新聞の売店まで——あるいは栄光の処刑台まで——歩こうとしているひとのような無頓着な軽やかさがある。」(Nabokov 2002: 635)

それにしても、ランスはどこに向かい、そこでどんな乗り物に乗り組もうとしているのか。そのようなことがらを語り手はそもそも詳述するつもりがないのだ。宇宙に旅立つという条件は与えられているものの、いかなる手立てを想像すべきかという指針すら示されていない以上、仮に読者が、クレティアンの作品における「荷車の騎士」、ランスロ(ランスロット)が、誘拐された王妃グニエーヴル(グィネヴィア)の行方を追うために乗ることを余儀なくされる荷車のようなものを思い浮かべたとしても、それを荒唐無稽として、全面的に否定して済ませてよい道理はないことになるだろう。

3. 言説の共存

作者ナボコフの当初の思いこみとは反していたかもしれないが、『ニュー・ Yorker』誌の編集者キャサリン・ホワイトは、「ランス」を大いに高く評価した。「まさにその獨創性を根拠として」、「破格に高い単語単価」で算出した原稿料（1, 256ドル）を同誌が支払うことを決めたのは、彼女の主導によるものであったに相違ない³¹⁾。しかしながら、この雑誌の創始者であるハロルド・ロス³²⁾の同意を得るためには説得が必要となった。彼の眼には、この作品はまったく理解し難いものとして映ったのだろう。そこまで極端な反応ではないにしても、編集部の中には、作者にたいして、いくつかの細部について問い合わせるべきだと感じる向きもあった。手直しの可能性を打診するという含みもあったものと推察することができよう。しかしながら、その結果は、自己の作品が極めて入念に練りあげられたものであるとする作者の頑強な主張が改めて確認されただけのことであった。

いざ雑誌に掲載されたのちには、「ランス」の物語内容をどのように受け止めるべきかわからないという声は読者のものとなる。説得力に欠けた、サイエンス・フィクションのパロディ以上のものを見いだすことができなかつたという不満が寄せられたさいには、編集部が（作者に代わって）応えなければならなくなるのだった。「彼 [ナボコフ] が「サイエンス・フィクション」を諷刺的に扱っているのはいうまでもないことですが、同時に彼は、それを根源にある真摯な主題の基礎として用いているのです。われわれの理解するところによれば、その主題とは、有為転変を習いとする世界における人間的感情の恒久性ということになるでしょう。現在のわれわれにとっては惑星間探査というのは奇想天外なように思えますが、計画遂行に纏わる感情は、中世において騎士ランスロットが戦闘に赴くときに抱かれた感情や、今日、息子が出征するときに喚起される感情と異なるものではありません。」³³⁾

どれほど奇想天外な、いまのところあり得ないと思えるような事態であろうと、それが実現したときにひとが感じることは、それ以前に感じられたことと変わるはずがないという知見が、「ランス」の物語を支えていることは確かだろう。焦点となるのは人間の心理と行動の普遍性、なかでもとくに冒険心や勇敢さにかかわる側面である。その範例あるいは原型となるものが、ここでは騎士道ロマンスに求められているのであり、そのために、騎士道ロマンスの登場人物（「黒の騎士サー・パーカード、赤の騎士サー・ベリモーンズ、緑の騎士サー・パートリーブ、藍の騎士サー・パーサント、そして……荒々しい故老サー・グラムモア・グラマーサム」³⁴⁾ [Nabokov 2002: 637]）、場所、道具立てのような、既存の、定型的な語彙がテキストに浸透することとなる。ランスが旅立ったあと、家のバルコニーに立って夜空を見あげる両親は、息子の旅を、彼と同じ名を有する伝説上の騎士が経験した試練と置き換えることのできるもの、それを忠実になぞるものであるかのように想像することしかできないという限界性に晒されて

いるということでもある。

くだんの惑星が「小さな篝火のように」空に昇るのを見守りながら、夫妻が思い描き得る形象あるいは情景とは、宇宙空間で生じ得る未知の出来事とは本来的にまったく無縁な、「荷車の騎士」の冒険譚を素材として流用したものにはかならない。「あのあたり、右手には剣の橋があり、異界（「他国から訪れた者が帰って来た試しのないところ」³⁵⁾）に通じている。ランスロットは多大な苦痛に堪え、言語を絶する苦悶を抱えながら、その橋を這って渡るのだ。」この箇所では、王妃の行方を追う騎士が、ゴールの国の境を越えるとき、刃を上に向けた「剣の橋」（le Pont de l'Espee）³⁶⁾を腹這いになって渡らなければならないという、クレティアンの作品の一場面³⁷⁾が踏まえられているのである。さらにそれに加えて、ここでは、マロリーの『アーサー王の死』の一節——「汝、危難の峠 [the Pass Perilous] と呼べる峠を越える勿れ」（第七卷第九章）³⁸⁾——が引かれる。「しかし、もうひとりの魔術師はこう命じるのだ。「汝、越えるべし。難所を切り抜けるヒューマー感覚を身につけるべし」と。」

惑星間探査を主題としていることを標榜しながら、一見したところそれにそぐわない、時代錯誤とも思える言辭を連ねるという戦略が、読者の当惑を招く恐れはじゅうぶんに考えられる。見かたを変えるならば、それは、たとえば過去の演劇作品（歌劇も含めて）を演出するにあたり、現代あるいは架空の未来を舞台として再解釈を図るという発想³⁹⁾とちょうど正反対の方向を目差すものであったといえるだろう。しかしながら、「ランス」においては、未来における、未知にたいする、果敢な、意志的な挑戦が、サイエンス・フィクション的言説ではなく、中世の騎士道ロマンスの構成要素を媒介として形象化されていると結論づけるだけでは、早計に過ぎるようだ。

この作品のうちにあっては、ミスタ・ボウクの学問的専門分野である中世文学が、冒険を語る語彙全般を独占的に供給しているわけではない。もうひとつの視点が介在する余地が周到に用意されているのだ。おそらくそこには、ランスの母、ミセス・ボウクの息子にたいする気遣いと関連させる意味合いもあると見てよいだろう。「垂直に聳える空の麓の暗い谷間で待つあいだ」、彼女が夫よりも鮮明に思い起こすのは、幼い頃から登山家気取りであったランスが専門家然とした態度でよく口にしていた、「クレヴァスや氷のゴシック的構築物を表わす特殊な名称」（Nabokov 2002: 637-38）のことなのである。

セラック（塔状の氷塊）やシュルント（氷河と岩壁のあいだにある割れ目）などという語が発せられるとき、「フランス語の反響とゲルマン語の魔力」（Nabokov 2002: 638）が親しく交わり合うさまは、中世のロマンスさながらであったとされる。このように、ランスが登山家としての一面を有することが機縁となって、登山にかかわる用語やイメージが、テキスト内にあらかじめ布置された中世文学の断片と組み合わせられ、直接的に融合し、調和を醸し出すこと

となるのである。その結果、バルコニーに立つふたりの人物のそれぞれの視点が、異なる言説の脈絡に仮託されつつ、共存するに到っているということもできるだろう。

「勇敢にもボウク老夫妻は、ランスがクランボン⁴⁰を踏みしめながら、薄氷に覆われた空の岩場を登攀し、星雲の柔らかな雪を掻き分け掻き分け、黙々と進んでゆくさまが、自分たちには見極められるように思うのだ。牛飼い座は、第十キャンプと第十一キャンプの中間のどこかにある、荒石と氷瀑に全面覆われた大氷河だ。」(Nabokov 2002: 637) そして、実際に(「小型望遠鏡」を通して)目視できるはずはないというのに、ランスを含む遠征隊員たちが互いの身体をロープで繋いで、切り立った岩壁を登ってゆく姿が、あたかもその場に現前しているいるかのように語られるのである。

「ランス」が執筆されたのと同じ年、1951年の夏期休暇のあいだ、ナボコフとその家族がロッキー山脈周辺で過ごしたという事実⁴¹をここで想起しておいてもよさそうだ。彼と妻ヴェーラが主に蝶の採集に熱中しているあいだ、息子ドミートリイは、登山に熟達する目的で、まずワイオミング州グランド・ティートン国立公園にあるジェニー湖にほど近い、ポール・ペツォルトとグレン・エクサムというふたりの著名な登山家が主宰する山岳ガイド校で二週間指導を受け、その後、ティートン山脈の険しい山腹を登攀することに情熱を注いだのだった。

危険を顧みない息子の行動にたいして、ナボコフ夫妻は全面的に賛意を示したわけではなく、むしろ危惧の念を抑えることができなかつたものと察せられる。けれども、対象はともかくとして、息子が抱く熱意そのものにかんして肯定的に評価することは吝かでなかつたらしい。ナボコフ自身の鱗翅類研究にたいするそれと類比し得るものと見なされたからであろう。夏の出来事を報告するウィルソンに宛てた書簡のなかでナボコフは、登山の意義を認め、敬意を払うことを忘れなかつた。訓練中、息子に手解きした人びとの有能さを褒め称えつつ、彼が認めているのは、「山々によって与えられる極めて肉体的な種類の修練は、どのようにしてかは定かでないものの、精神的経験へと変質させられる」ということなのである。

すでに見てきたように、「ランス」においては、現時点で適切な言語表現を得ることのかわない惑星間探査という架空の事象が、中世における騎士道ロマンスならびに現代における登山と理念的になんらかの共通性を有するものとして、語り得るものの圏域へと手繰り寄せられる。そのさいには、既存の言説のそれぞれを成り立たせている語彙それ自体が、隠喩や寓喩としてではなく、そのまま加工されることなく流用されている。テキスト全体の構成にあたり、作者が着想したものを定義づけるためには、コラージュ的手法という呼びかたを当て嵌めておくのがひとまず妥当かもしれない。

ただし、本来的に別個の次元に属す複数の言説を任意に組み合わせることが可能だとしても、両者が、必ずしも完全に均等な意味内容を有しているわけではない点も見落としてはならない。

実像を知り得ない、虚構上の騎士の試練（あるいは遍歴）の場合には、読者がみずからの想像によってほとんどすべてを補うことが予め求められている。現実的行為である登山の場合は、それと対照的な事態が生じる。騎士道ロマンスが誇示することを禁欲的に控えている視覚的イメージは、登山という文脈にあって浮上するときには、むしろ過剰なまでに増殖し、積み重ねられ、登場人物たちの感情の重要な基盤をなすに到るのである。

「ああ、また彼の姿が見えるようになった！ふたつの星のあいだの峡谷を渡り、それから、極めて緩慢に、ほとんど垂直に聳え立つ断崖の表面を横断しようとするが、掴まる場所が崩れやすいために、あの手探りする指先、擦れる登山靴をまざまざと呼び起こしてみるだけで、高所恐怖症的な嘔吐に見舞われるほどだ。そして、溢れ出す涙越しにボウク老夫妻が眼にするのは、岩棚のうえで置き去りにされたり、もう一度登りはじめたり、凄愴な状況にあっても無事安泰に、砕氷斧と背囊を携え、いくつかの山頂よりもさらに高い山頂に到達したりするとき、光で縁取られた凍々しい横顔を見せるランスの姿なのである。」（Nabokov 2002: 638）

仮に、この短篇小説を読み解くにあたり、真の重点が置かれるべきは、ナボコフの息子ドミートリイの実体験⁴²⁾によって裏づけられた、登山という行為の特質（あるいは美質）なのだとする観点に立つとすればどうなるだろうか。「ランス」の物語が、ナボコフ一家をモデルとしたある家族を中心としつつ、人間の冒険的行動——「好奇心が勇敢さを超えているがゆえに」（Nabokov 2002: 640）、無限の勇敢さを備えるまでになったひとの行動——という主題をめぐって展開していることは認めておいてよさそうだ。

しかしながら、繰り返すようだが、ここで追求されているのは飽くまでも、その主題が普遍的なものだということなのである。同様の主題を扱うにしても、これ見よがしに現在という時点に立脚して、具体的な細部を焦点として、限定的に掘りさげるという選択肢があり得ることは確かであろう。だが、それは意図的に回避されている。その代わりに、くだんの主題を要とし、過去と未来の双方への懸け橋を見出し得るものとして取り扱おうとする試みが、ここに結実していると称することができるのだ。

4. 探求者の孤独

サイモン・カーリンスキーが指摘しているように、「ランス」の構造ならびに物語内容をナボコフの他のいくつかの作品と比較しつつ論じることもしゅうぶん考慮に入れてよいだろう。

「「ランス」の物語は、その短い範囲のうちで、三つの、個々別々の、互いに重なり合う現実のレベル、惑星間探査、登山、中世ロマンスを結び合わせている。それに先行して英語で書かれた短篇小説「時間と引き潮」⁴³⁾が、現在、過去、想像し得ない未来を同時に据えていたのと同様に、後年から見るならば、「ランス」は、『アーダ』⁴⁴⁾で用いられた文学的方法を予感

させる習作であるようにも映るのだ。」⁴⁵⁾

とはいうものの、「ランス」の場合には、時間的に隔たった三つの層が同一次元において並列化されているというだけでは片付けられない側面があることに留意しなければならない。ひとつには、不本意にもサイエンス・フィクションというジャンルとの近接性を誤認されるという危険を冒してまで、ナボコフが、未知の領域への挑戦という物語に取り組もうとした動機には、彼自身の個人的な思い入れがかかわっていると見ておく必要があると思われる。さらに、もうひとつ重要な点としては、この作品が、すでに他の作品においても取り扱われたことのある、父、母、息子という三者の関係を鍵としつつ、そこになにを加えようとしているのかという点についても検討してみるべきであろう。

それらふたつの点は、この短篇小説の第三セクション後半部以降における物語の展開に関与してくることとなる。たとえば、同じように三人家族を登場させた、ナボコフの別の短篇小説「記号と象徴」⁴⁶⁾のうちにわれわれが読むものは、息子が特異な精神疾患に苦しみ、病院で療養しているあいだに自殺を試みるという反事実的な設定であったが、「ランス」の場合には、それとは異なる状況のもとで、不測の事態にたいする恐れが両親の心を占めるようになる。いやむしろ、息子の不在が死そのものと実質的に変わらぬ喪失として受け止められるようになるを見たほうが適切だろうか⁴⁷⁾。非常に単純に考えるならば、作者はみずからの身に降りかかることを避けたい不幸——連絡が途絶え、息子の身になにか異状が生じたのではないかという不安に苛まれながら、手を拱いていなければならないような事態——を、いわば一種の予防措置として、自分の身代わりである虚構の登場人物たちに負わせようとしたのだと解釈することもできそうだ。

「彼は目的地に到達したのだろうか——そして、もし到達したならば、彼は私たちを見ていのだろうか」(Nabokov 2002: 639)という気遣わしげな問いかけで第三セクションが締め括られた直後、第四セクション冒頭では、壮大極まる視点の転換が生じる。「古典的な永生者が肘を突いて凭れている花咲ける岩棚から、この地球、この玩具、様式的な天空でゆっくりと展示されながら回転しているこの独楽を眺めると、なにもかもが派手で鮮明に見える」と語り手はいう。遙か彼方から捉えられたバルト海、南北アメリカ、アフリカ、オーストラリアなどの眺望には、思い描いてみるだけでも、確かに心躍らせるものがあるだろう。

だがそれは、他の惑星に派遣された遠征隊員の眼に映じるものというよりはむしろ、「死ぬことという概念」と「地上を離れることという概念」を同一視する人びとの想像の及ぶ範囲で仮初めにかたちづくられたものにほかならない。他の惑星上でひとが経験するであろうことは、それとは完全に異なっていると考えるべきだというのが語り手の論点なのだ。「私と同時代の者」に見受けられるような、「自分たちの靈魂」が天上から「故郷の惑星」を見おろすとき、

緯線と経線、「地球全域に亘る戦争の矢印」や、「休暇旅行で訪れることのできる黄金郷の絵地図」のようなものが視界にはいるのではないかという期待は、地球を取り巻く大気圏の厚みと、塵、乱反射、霧などといった「あらゆる種類の視覚上の陥穽」を勘案するならば、もともと叶えられる見込みがない。「千変万化する雲の隙間越しに」大陸が垣間見えたとしても、「奇妙な仮装」、「色彩が放つ不可解な煌めき」、「判別不可能な輪郭」などのために、見過ごされてしまうことになりかねないのだ。

ランスが到達した惑星で過ごす最初の夜について、「想像不可能な世界の想像上の沈黙」と称していることから読み取れるように、語り手が取り組もうとしたものとはある種の思考実験なのだと考えてよい。当初それは、純然たる思弁という特殊化された領域に留まるものだったはずである。ところが、未来を扱った作品の場合には起こりがちな事態というべきか、発表後に、文学者の予期を超えた、劇的な転回が招来されるということもあり得る。今日「ランス」を読む読者は、過去数十年のあいだに、人類が地球外に進出する可能性が厳然たる事実となり、広く流布した画像情報など、さまざまな関連事項が容易に万人に提供され、共有され得る知識の蓄積へと拡大していった過程をよく承知しているのだ。

「ランス」の執筆から十数年後、1969年七月二十日、アポロ11号による——正確に言えば、第三段ロケットS - I V Bから切り離された司令船コロンビアからさらに切り離された着陸船イーグルによる——人類史上最初の月面着陸にかんする報道と、とりわけリアルタイムで送信された音声と映像によって昂奮を味わわなかった者は少ないと思われる。ナボコフの場合は、自身が多くの作品のなかで取りあげてきた探求の主題との関連からいって、それに近似した企図が、本物の宇宙空間において具現されるのを見守ることができたのは、なにより感慨深かったに違いない⁴⁸⁾。また、わざわざTV受像機を借りて見た「黒い空に浮かぶ大理石模様の地球」の像は、彼がかねてから予想していたもの、幼い頃から肉眼で直に見ることを切望してきたものをいくらか髣髴させたのかもしれない。

しかし、当然のことながら、ナボコフの存命中に実現した有人宇宙飛行計画は、作者が作品によって表象しようとした理念を十全な形で包含しているわけではない。況してや、「ランス」が執筆された1950年代初頭においては個人の空想でしかなかったものが、語り手あるいは作者が嫌忌する科学技術の急激な発達の恩恵を被ることにより、皮肉にも、予想より遙かに早く現実のものとなったなどと臆断して、事足りるはずはあるまい。すでに引用した第一セクション冒頭で、ランスが訪れた惑星と地球のあいだの距離が、「先週の金曜日とヒマラヤ山脈の形成期のあいだにある歳月」、「読者の平均年齢の百万倍」をマイルに置き換えた程度と見積もられていた点を考慮に入れる必要があるからである。

「読者の平均年齢の百万倍」というのが、どのくらいの数値を指しているかは漠然としてい

る。だが、ヒマラヤ造山運動と呼ばれる、インド亜大陸とユーラシア大陸の衝突によって、のちにヒマラヤ山脈を形成することとなる隆起が生じたのは、およそ五千万年前のこととされているので、語り手がその年数を代入することにより仄めかそうとしている距離とは、数千万マイルほどということになると考えてよい。また、当の惑星の名前こそ敢えて明記はされていないものの、ランスが（「オレンジ色の砂煙」 [Nabokov 2002: 640] を巻きあげながら）着陸した地点について、「タルシス砂漠」⁴⁹⁾、（「紫色の水溜まり」である）「フェニクス」⁵⁰⁾、「オティ」⁵¹⁾という地名が言及されていることから推し量るならば、語り手の念頭にあるものが火星であることは疑いの余地がない⁵²⁾。

火星という天体の印象は、ナボコフが少年時代に愛読したH・G・ウェルズの作品を通じて、なんらかの形で刻まれていたと見ることもできようが、ここでは、その場所が異界として、たんに地球ではないところというだけではない、限界を超えた、常識や認識の埒外に位置づけられるべき次元として捉えられている点がなによりも重要であろう。「想像力と科学のひと」と称されるランスは、天体を構成する「かつて名づけられたことのない物質」に触れ、それを調査することに名状し難い喜びを覚えるのだという。その欲望を満足させたという疼きがなければ、科学はあり得ないのだとされている。

「私の空想を極限まで駆使するとき、見えてくるのは、猿ならばまったく経験しないかもしれないような狼狽を彼が乗り越えようとしているところなのだ」と語り手はいう。そのような状況に身を置くとき、ひとがどのようなことを経験するか、どのように振る舞うべきかという課題が、この作品の要諦をなしていることが、このあたりで判明してくる。考察の契機をなすものとして、宇宙や惑星という設定が便宜的に導入されていたということもまた、同時に鮮明化するといえるだろう。実をいえば、焦点をなす問題自体は、そのような設定が仮になかったとしても、到るところで生起し得るはずのものなのだ。「周知のごとく、このような場合にあっては事態がそうなりがちである通り、ただちに、恐ろしくなるくらい、撤回不能なまでに解決されてしまう事象もあれば、ひとつまたひとつと出現しては、徐々に謎が解き明かされてゆく事象もある。」

語り手は、惑星上におけるランスの体験を、みずからが過去から引き摺ってきたある種の想念と結びつけようとしている。そのために、自身の夢のことが引き合いに出される。それは、語り得ぬものを暫定的に語り得るようになるための方策であるともできるだろう。「私が七歳か八歳の少年だった頃、なんとなく周期的に回帰してくるよう感じられる夢を見るのがよくあった。その舞台となっていたある種の環境は、これまで数多くの異郷を訪れたことのある私にも、道理に合うように判別したり、特定したりすることの適わないようなものであった。それをいま使って、私の物語のうちにぽっかり口を開けた穴というか、生傷を修復する

ために役立てたいという気持ちもある。その夢の舞台となっていた環境には取り立てて眼醒ましいところはなく、奇怪なところも、奇異なところすらなかった。ただ、少しばかりの平面で表現され、少しばかりのうっすらとした星雲状物質で一面覆われた、少しばかりの漠然とした安定性があるだけであった。別のいいかたをするならば、ある眺めの表面ではなく、なんの個性もない裏面でしかなかったのだ。」(Nabokov 2002: 640-41)

なんら特筆すべき特徴がない、というよりも、無そのものといったほうが適切かもしれない場所とは、語り手が、あるいはすべてのひとが、なんの手掛かりもなく、なにかを発見できるという当てすらなく、乗り出さなければならぬ未来にたいして抱かれた両面価値的感情を比喩的に表わしたものであるようだ。逆の見かたをするならば、ここでランスの物語に先行する、語り手自身の少年時代の記憶が敢えて話題とされているという事実こそを重要視する必要がある。語り手の夢あるいは夢想それ自体が、この短篇小説の起源であったと論じるという道筋も開けてくるからである。

「ランスの話をしていると、私は自分の夢を例としながら、あのなにかを差し出したいという気になる——ところが、おかしなことに、ここまで書いてきたものを読み直してみると、その背景である、事実そのままの記憶は消失してしまう——いまとなっては、完全に消失してしまった——そして私には、その記述の背後になんらかの個人的記憶があることをみずからにたいして証し立てる手段がないのだ。私がいいたかったのは、おそらくランスとその同僚たちが目的の惑星に到達したときには、私の夢によく似たなにかを感じただろうということだ——だが、それはもはや私の夢ではない。」(Nabokov 2002: 641)

人間の肉体的、精神的活動が秘めていると見なされる(理論的にいえば)無限の可能性は、ナボコフがしばしば関心を寄せてきた主題であるが、それを取りあげるとき、彼が極めて過酷な(悲壮ともいえるほどの)条件を登場人物たちに課しているのは興味深いといえる。短篇小説「オーレリアン」(この標題は「鱗翅類採集飼育家」を意味している)の主人公は、ベルリオンで蝶や蛾の標本とともに文房具や教材を商う店を経営しながら、いまだ訪れたことのない世界各地(「ランス」のなかで言及されていたアンデス山脈までも含まれることになるかもしれない)で蝶を採集することを夢想し続けた末に、一念発起して、家と妻を捨てて旅立つ決意を固め、その直後に急死する。そのような運命は、カフカス山脈、ことにその最高峰であるエリブルース山に足を踏み入れることを願っていたナボコフが、後年、アマゾン川流域を訪れることを望むようになり、結局、いずれの希望も実現することができなかったという伝記的事実⁵³⁾と皮肉にも照応していることになるだろう。

作品中では、憧憬を憧憬のまま終わらせることなく、果敢にも前人未踏の地へ乗り出す者が登場する場合もある。長篇小説『賜物』(原題は *Дар*、1937-38年、ロシア語版1952

年、英語版1963年)⁵⁴⁾の主人公フョードル・コンスタンチーノヴィチ・ゴドゥノーフ=チェルディンツェフの父コンスタンチーン・キリーロヴィチ・ゴドゥノーフ=チェルディンツェフ伯爵は、ロシア革命が迫りつつある頃、中央アジアで探検旅行を行ないながら、志半ばで行方が途絶えてしまう⁵⁵⁾。探検家が悲劇的な最期を迎えるという物語にたいするナボコフの思い出は、とりわけ深かったと見てよい。その観点から彼は、人口に膾炙した実話(著名なノンフィクションや映画化作品によって知られるもの)に眼を向けることもあった。韻文で書かれた戯曲『極点』(原題は *Полюс*, 1924年)⁵⁶⁾において題材とされたのは、1912年、南極点到達を果たしながら遭難し、探検隊員全員とともに亡くなったロバート・ファルコン・スコットが遺した日記である。

英雄的な企ての蹉跌という展開は、「ランス」の物語のうちに取り入れられていたとしてもおかしくはなかったであろう。ところが、通信の途絶のために消息が定かでなくなっていたランスは、第五セクションで突然帰還を果たす。「操縦士たち、天体物理学者たち、博物学者のうちひとり」は全員帰ってきた。もうひとりのダニーという隊員だけが亡くなったのだった。そのことがランスの精神状態になんらかの影響を及ぼしたかどうかは詳らかにされていない。とはいえ、病院に入れられた息子を両親が見舞う場面になにか沈痛なもの漂っていることは否定できないだろう。

「記号と象徴」のなかで生じていた事態とは異なる意味合いにおいて、親子のあいだの意思の疏通はうまく成立しなくなっている。その原因は、ランスたちの事蹟(「大統領の書簡」[Nabokov 2002: 642]を受けるようなもの)が国家の重大機密事項にかかわっていると、ミセス・クーヴァーという看護師が来訪者と入院患者の会話を監視し、折あらば妨げようとするとかということにあるのではない。ランスが人智を超えた境域に立ち入り、言葉では表現し得ないことを経験したという含みがあるはずである。

ランスは両親にたいして、「十一月にはもう一度戻るつもりです」という。その言葉を聞いてボウク夫妻がどのような反応を示したかは明確にされていないものの、息子がまたしても手の届かない場所に去ろうとしていることから、深い絶望があったであろうことは疑いない。いうまでもなく、未来へ、未知へと向けられるランスの意識は、そのような絶望からは決定的に懸け離れたものであるはずだ。だがそこには、なにものによっても救われることのあり得ない孤独が代償として付き纏わざるを得ない。それは、ナボコフがたびたび作品の主題としてきた探求者たちの営為の普遍性、不滅性と表裏一体をなすものと思われるのである。

註

- 1) Vladimir Nabokov, "Cloud, Castle, Lake" in Nabokov 2002: 430-37. 英語訳にあたっては、ピーター・パーツォフが協力した。「オーレリアン」と「フィアルタの春」の場合も同様である。
- 2) Vladimir Nabokov, "The Aurelian" in Nabokov 2002: 248-58.
- 3) Vladimir Nabokov, "Mademoiselle O" in Nabokov 2002: 480-93. 英語訳にあたっては、ヒルダ・ウォードが協力した。
- 4) Vladimir Nabokov, "Spring in Fialta" in Nabokov 2002: 413-29.
- 5) Vladimir Nabokov, "The Assistant Producer" in Nabokov 2002: 546-59.
- 6) Vladimir Nabokov, *Nine Stories* (New York: New Directions, 1947).
- 7) Vladimir Nabokov, *Nabokov's Dozen* (Garden City, New York: Doubleday and Company, 1958).
- 8) Vladimir Nabokov, "Vane Sisters" in Nabokov 2002: 619-31.
- 9) Vladimir Nabokov, "Lance" in Nabokov 2002: 632-42. 引用箇所は括弧内のページ番号によって示すこととする。
- 10) Vladimir Nabokov, *Nabokov's Quartet* (New York: Phaedra, 1966). 「ヴェイン姉妹」以外にこの短篇小説に収められている三作品——「名誉の問題」（1927年、『ニュー・ Yorker』誌1966年九月三日号に英語訳を掲載）、「リーク」（1939年、『ニュー・ Yorker』誌1964年十月十日号に英語訳を掲載）、「博物館訪問」（1939年、『エスクワイア』誌1963年三月号に英語訳を掲載）——は、いずれもロシア語から翻訳されたものである。
- 11) Vladimir Nabokov, *Russian Beauty and Other Stories* (New York: McGraw-Hill, 1973). この短篇小説集には「博物館訪問」が再録されている。
- 12) Vladimir Nabokov, *Tyrants Destroyed and Other Stories* (New York: McGraw-Hill, 1975). この短篇小説集には「リーク」と「ヴェイン姉妹」が再録されている。
- 13) Vladimir Nabokov, *Details of a Sunset and Other Stories* (New York: McGraw-Hill, 1976).
- 14) 作者自身の言（『ある日没の細部とその他の短篇小説』に寄せた「緒言」）によれば、これらの短篇小説集は、「英語訳に価する私のロシア語短篇小説」の集成であるとされている。Nabokov 2002: 668.
- 15) 鈴木聡「指標と伝言——ヴラジーミル・ナボコフの「ヴェイン姉妹」」（『東京外国語大学論集』第87号、2013年）。
- 16) Nabokov and Bruccoli 1989: 115-18.
- 17) Vladimir Nabokov, "Signs and Symbols" in Nabokov 2002: 523-45. 『ニュー・ Yorker』誌に掲載されたさいには、「Symbols and Signs」という表題に改められたが、のちに短篇小説集『ナボコフのオーダーズ』に収録されたさいに本来の表題に戻された。
- 18) 「ランス」が、異常なまでの昂揚感のうちに書きあげられた作品であることも銘記しておいてよいだろう。Cf. Boyd 1991: 206.
- 19) Karlinsky 2001: 300-01.
- 20) Karlinsky 2001: 293.
- 21) 1951年十一月十八日付ウィルソン宛書簡で用いられた表現である。Karlinsky 2001: 296.
- 22) ラテン語で海を意味する“mare”の複数形である。
- 23) アメリカ合衆国の天文学者カール・オットー・ランブランド（1873年生、1951年歿）の例が引き合いに出されている。その名は、月と火星のクレーターに付されている。
- 24) サー・トマス・マロリーの『アーサー王の死』（*Le Morte Darthur*, 1485年）においては、ニミュエという呼び名が採用されている。後世においては、ヴィヴィアンという名が定着するようになった。
- 25) クレティアン・ド・トロワが大半（六千行ほど）を執筆しながら中絶したため、残り千行ほどをゴドフロワ・ド・ラニーが引き継ぎ、完成させたとされる『ランスロあるいは荷車の騎士』（*Lancelot ou Chevalier de la charrette*, 1180年頃）を指す。引用にあたっては、Chrétien de Troyes, *Le Chevalier de la Charrette*, edited by Alfred Foulet and Karl D. Uitti. Classiques Garnier

- (Paris: Bordas, 1989) を電子化して掲載しているプリンストン大学のサイト (The Princeton Charrette Project) を参照することとした。< <http://www.princeton.edu/~lancelot/lancelot2.html>>
- 26) 第二セクション以降では、ランスという短縮形で呼ばれることになる。語り手によれば、この人物は、「どの程度かわからないくらい隔たった私の子孫」(Nabokov 2002: 634) であるとされる。そのことと暗に照応させるためか、「ボウク」(Boke) という姓は、「ナボコフ」の第一音節と第三音節を省略したものとなっている
 - 27) Boyd 1990: 174.
 - 28) この箇所においては、宇宙船を意味する“spacer”という単語が用いられている。ナボコフ自身の説明によれば、これは、彼が反撥を感じながらも丹念に調査した(『ギャラクシー・サイエンス・フィクション』誌などの)雑誌類で実際に使われていた語である。Boyd 1991: 208, 692 n.26. 『オックスフォード英語辞典』(OED)の該当項目に初出例として記載されているものは、1942年の記事である。
 - 29) 犬の唾液分泌に着目した実験ならびに観察などを通して、条件反射研究を創始したことで知られる、生理学者イヴァーン・ペトロヴィチ・パヴロフのことが想起されている。
 - 30) 「ランス」が執筆された当時であつては、飽くまでも未来予測(空想もしくは構想といつてよい)の域に留まっていたことは間違いないが、1957年10月、ソヴィエト連邦が打ちあげた世界初の人工衛星、スプートニク1号以降、急速に現実性を増すようになる。
 - 31) Boyd 1991: 208, 692 n.25.
 - 32) ハロルド・ロス(1892年生、1951年没)は、1925年に『ニュー・ Yorker』誌を創刊し(最初の号は二月二十一日付)、1951年十二月六日に亡くなる直前まで、同誌の編集に携わった。
 - 33) Boyd 1991: 209-10. 編集部から一読者に宛てた書簡であつたが、その内容は、ホワイトを通じてナボコフに伝えられ、彼を満足させた。Boyd 1991: 692, n. 27.
 - 34) これらの騎士の名前は、サー・トマス・マロリーの『アーサー王の死』第七巻に登場する。
 - 35) “Don nus estranges ne retourne.” *Lancelot ou Chevalier de la charrette*, l. 645.
 - 36) *Lancelot ou Chevalier de la charrette*, l. 677, *passim*.
 - 37) *Lancelot ou Chevalier de la charrette*, ll. 3124-31.
 - 38) Malory 1969: 247. のちにリネットという名であることが判明する乙女が、ボーマン(円卓の騎士のひとり、ガレスの別名)に与える訓戒のなかに含まれる言葉である。
 - 39) 敢えて具体例を挙げるには及ばないと思われるが、ことに20世紀後半以降、リヒアルト・ヴァーグナーの作品の演出などでしばしば見られるようになったものを想起することは無駄ではあるまい。
 - 40) 滑落防止のために靴底に括りつける鋼鉄製スパイク。
 - 41) 日付が記載されていないが、1951年九月投函と推定されるウイルソン宛書簡のなかで報告されている。Karlinsky 2001: 294-95. Cf. Boyd 1991: 203.
 - 42) Cf. Shapiro 2009: 213, n. 65.
 - 43) Vladimir Nabokov, “Time and Ebb” in Nabokov 2002: 580-86. 初出は『アトランティック・マンズリー』誌1945年一月号。
 - 44) Vladimir Nabokov, *Ada, or Ardor: A Family Chronicle* (1969; New York: Vintage International, 1990).
 - 45) Karlinsky 2001: 301, n. 2.
 - 46) この作品にかんしては、以前論じたことがある。鈴木聡「関係と妄想——ヴァラジール・ナボコフの「記号と象徴」」(『東京外国語大学論集』第95号、2017年)。
 - 47) 「ランスロットは去った。今生で彼に会えるという望みは、永世で彼に会えるという望みにほぼ等しい。」Nabokov 2002: 637. 息子がいない部屋の沈黙は、両親にとって「耐え難い」(Nabokov 2002: 639) ものに感じられる。
 - 48) Cf. Boyd 1991: 569-70; Wylie 2010: 173.
 - 49) タルシス地域とは、火星の赤道に位置する火山平原である。Cf. Nicol 1987: 11.
 - 50) フェニキス湖。

- 51) オティ地溝帯。
- 52) 2018年七月、大接近時における地球と火星の距離は五千七百五十九万キロメートル（三千五百七十八万マイル）であった。2020年十月、火星が地球に最接近するさいの距離は、六千二百七万キロメートル（三千八百五十六万マイル）である。
- 53) Cf. Nabokov 1984: 10. ドミートリイ・ナボコフによる解題（“Nabokov and the Theatre”）に含まれた回想の一部である。
- 54) Vladimir Nabokov, *The Gift*, translated by Michael Scammell with the collaboration of the author (1963; New York: Vintage International, 1991).
- 55) コンスタンチーン・キリーロヴィチは、1919年、帰国の途中、シベリアのどこかで亡くなったとする記事が『ソヴィエト百科事典』に掲載されているが、1917年夏、彼が、フランス人宣教師に目撃された場所とは、“Chute”というチベット山地の村の近くであったとされる。Nabokov 1991: 134-36. この地名に漢字を当て嵌めるならば、折多（拼音では Zhéduō）とするのが妥当であろう。そこから判断して、フォードルの父が失跡したのは、今日の四川省甘孜藏（カンゼ・チベット）族自治州のいづれかであったと見てよいと思われる。Cf. Leving 2011: 275.
- 56) Vladimir Nabokov, *The Pole: Drama in One Act* in Nabokov 1984: 265-83.

参考文献

- Barabtarlo, Gennady. 1995. “English Short Stories.” In *The Garland Companion to Vladimir Nabokov*. Ed. Vladimir E. Alexandrov. New York and London: Garland Publishing, Inc., 101-17.
- . 1999. “Nabokov’s Trinity (On the Movement of Nabokov’s Themes).” In *Nabokov and his Fiction: New Perspectives*. Ed. Julian W. Connolly. Cambridge University Press, 109-38.
- Boyd, Brian. 1990. *Vladimir Nabokov: The Russian Years*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- . 1991. *Vladimir Nabokov: The American Years*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Fowler, Douglas. 1974. *Reading Nabokov*. Ithaca: Cornell University Press.
- Howell, Yvonne. 1993. “Science and Gnosticism in ‘Lance.’” In *A Small Alpine Form: Studies in Nabokov’s Short Fiction*. Ed. Charles Nicol and Gennady Barabtarlo. New York and London: Garland Publishing, Inc., 181-92.
- Karlinsky, Simon, ed. 2001. *Dear Bunny, Dear Volodya: The Nabokov-Wilson Letters, 1940-1971*. 1979; Revised and Expanded Edition, Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press.
- Kelman, Steven G., and Irving Malin, eds. *The Torpid Smoke: The Stories of Vladimir Nabokov*. Amsterdam, Netherlands: Rodopi.
- Lacy, Norris J., ed. 1996. *The New Arthurian Encyclopedia: New Edition*. New York and London: Garland Publishing Inc.
- Leving, Yuri. 2011. *Keys to The Gift: A Guide to Vladimir Nabokov’s Novel*. Boston: Academic Studies Press.
- Malory, Sir Thomas. 1969. *Le Morte D’Arthur*. Vol. I. Edited by Janet Cowen. With an introduction by John Lawler. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books.
- Nabokov, Dmitri, and Matthew J. Bruccoli, eds. 1989. *Vladimir Nabokov: Selected Letters 1940-1977*. San Diego: Harcourt Brace Jovanovich.
- Nabokov, Vladimir. 1990. *Ada, or Ardor: A Family Chronicle*. 1969; New York: Vintage International.
- . 1991. *The Gift*. Translated by Michael Scammell with the collaboration of the author. 1963; New York: Vintage International.
- . 1980. *Lectures on Literature*. Ed. Fredson Bowers. New York: Harcourt Brace Jovanovich / Bruccoli Clark..

- . 1985. *The Man from USSR and Other Plays: With Two Essays on the Drama*. Translation and introduction by Dmitri Nabokov. New York: Harcourt Brace Jovanovich
- . 1958. *Nabokov's Dozen*. Garden City, New York: Doubleday & Company.
- . 2002. *The Stories of Vladimir Nabokov*. 1997; New York: Vintage International.
- . 1990. *Strong Opinions*. 1973; New York: Vintage International.
- Nicol, Charles. 1987. "Nabokov and Science Fiction: 'Lance.'" *Science-Fiction Studies*, 14, no.1, 9-20.
- Proffer, Carl R., ed. 1974. *A Book of Things About Valdimir Nabokov*. Ann Arbor: Ardis.
- Shapiro, Gavriel. 2009. *The Sublime Artist's Studio: Nabokov and Painting*. Evanston, Illinois: Northwestern University Press.
- Shrayer, Maxim D. 1999. *The World of Nabokov's Stories*. Austin: University of Texas Press.
- Walters, Lori J., ed. 1996. *Lancelot and Guinevere: A Case Book*. New York and London: Garland Publishing Inc.
- Wylie, Barbara. 2010. *Vladimir Nabokov*. London: Reaktion Books.

本研究は JSPS 科研費 JP17K02539 の助成を受けたものです。